Vertical profiles of 226Ra and 228Ra in the Japan Basin of the Sea of Japan

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2017-10-05
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者:
	メールアドレス:
	所属:
URL	http://hdl.handle.net/2297/29915

日本海盆における²²⁸Raと²²⁶Raの鉛直分布からみた海水循環

井上睦夫¹、皆川昌幸²、吉田圭佑¹、中野佑介¹、小藤久毅³、 長尾誠也¹、濱島靖典¹、山本政義¹

¹〒923-1224 石川県能美市和気町 金沢大学環日本海域環境研究センターLLRL ²〒236-8648 神奈川県横浜市 独立行政法人水産総合研究センター中央水産研究所 ³〒035-0064 青森県むつ市港町 日本海洋科学振興財団

Inoue, M., Minakawa, M., Yoshida, K., Nakano, Y., Kofuji, H., Nagao, S., Hamajima, Y. and Yamamoto, M.: Vertical profiles of ²²⁶Ra and ²²⁸Ra in the Japan Basin of the Sea of Japan

[はじめに]

日本海は、ユーラシア大陸と日本列島に囲まれた縁辺海で、対馬、津軽、宗谷といった浅い海峡 (<150 m) により隣接する海洋とつながっている。表層水は対馬海流やリマン海流により循環 系を形成しているが、これら海流により蓋をされる形で水深約 300 m 以下に、冬季の鉛直混合に よって形成された低温の日本海固有水として深層循環を形成している。Ra 同位体は海水中に溶存 しているため、海水循環のトレーサーとして有効である。本研究では ²²⁶Ra, ²²⁸Ra 濃度の鉛直分布 から固有水の滞留時間を見積もった。

[試料と実験]

海水試料は、07 年蒼鷹丸調査航海において日本海盆(SY07; N41°02', E138°10'; 水深 3700 m) で 14 層 (各 50 L) 採取した。²²⁶Ra, ²²⁸Ra の測定には、低バックグラウンドγ線法を適用した。測 定法は Nakano *et al.* [1] に詳しい。

[結果]

²²⁶Ra 濃度は表層で1.5mBq/L と低く、下部固有水層 (1000 m 以深) では 2.3 mBq/L に上昇した (Fig. 1b)。一方、²²⁸Ra 濃度は日本海盆の表層では 1.2 mBq/L と高く、深さとともに急激に減少、 下部固有水層でほぼ一定 (~0.1 mBq/L) となった (Fig. 1c)。



Fig. 1. Vertical profiles of a) potential temperature and salinity, b) ²²⁶Ra, and c) ²²⁸Ra activities of the *SY07* water samples from the Japan Basin.

[固有水滞留時間の見積もり]

本研究では、2 ボックスモデル(混合層 (MLW) + 上部固有水層(UPW)と下部固 有水層(UPW))を想定し、²²⁶Ra,²²⁸Ra 濃 度より、下部固有水の滞留時間を計算した (Fig. 2)。

下部固有水層の²²⁶Ra,²²⁸Ra 量は式 1)、2) で表わされる。

 $V\delta[^{226}Ra]_D/\delta t = [^{226}Ra]_{(M+U)}v + F_{226}S -$

 $[^{226}Ra]_{D}v - [^{226}Ra]_{D}V\lambda_{226}$ 1)

 $V\delta[^{228}Ra]_D/\delta t = [^{228}Ra]_{(M+U)}v + F_{228}S -$

 $[^{228}\text{Ra}]_{D}v - [^{228}\text{Ra}]_{D}V\lambda_{228}$ 2)





[V; 下部固有水量 (m³): [²²⁶Ra], [²²⁸Ra]; ²²⁶Ra, ²²⁸Ra 濃度 (Bq/m³ (= mBq/L)): v; 混合層-上部固 有水層と下部固有水層間の混合速度 (m³/y): F₂₂₆, F₂₂₈; 海底堆積物からの ²²⁶Ra と ²²⁸Ra の溶出フ ラックス (Bq/m²/y): S; 海底の面積 (m²): λ₂₂₆, λ₂₂₈; 壊変定数 (1/y)] (下付きの M+U, D は、混合 層+上部固有水層および下部固有水層)

²²⁶Ra, ²²⁸Ra 濃度 が定常状態と仮定 (δ [²²⁶Ra]_D/ δ t = δ [²²⁸Ra]_D/ δ t = 0) すると、

 $\Delta [^{226} Ra]_{(M+U)-D}/\tau_w + F_{226}S/V - [^{226} Ra]_D \lambda_{226} = 0 \quad 1),$

$$\Delta [^{228} \text{Ra}]_{(M+U)-D} / \tau_{w} + F_{228} \text{S} / \text{V} - [^{228} \text{Ra}]_{D} \lambda_{228} = 0 \quad 2)$$

ここで固有水滞留時間を τ_w (= V/v) (y)、 [²²⁶Ra]_(M+U) - [²²⁶Ra]_D = [²²⁶Ra]_(M+U) - [²²⁸Ra]_(M+U) - [²²⁸Ra]_D = [²²⁸Ra]_(M+U) - b とすると、 τ_w は式 3) より見積もられる。

 $1/\tau_w = \{\lambda_{226}[^{226}Ra]_D - F_{226}/F_{228}\lambda_{228}[^{228}Ra]_D\} / \{\Delta[^{226}Ra]_{(M+U)-D} - F_{226}/F_{228}\Delta[^{228}Ra]_{(M+U)-D}\} - 3)$

日本海海底堆積物のリーチング実験で求めた²²⁶Ra/²²⁸Ra比(F₂₂₆/F₂₂₈ = 0.92)、混合層+上部固有 水層および下部固有水層の²²⁶Ra,²²⁸Raのインベントリー([²²⁶Ra]_(M+U) = 1.83 mBq/L; [²²⁶Ra]_D = 2.47 mBq/L; [²²⁸Ra]_(M+U) = 1.08 mBq/L; [²²⁸Ra]_D = 0.11 mBq/L)を式3)に代入すると、100年という値が 得られる。滞留時間100年に相当する量の上層水が下部固有水層に混入していると考えられる。 この結果は、最近、様々な核種により計算された固有水層の滞留時間(100-200 y: ³H [2]; ¹⁴C [3, 4]; ¹²⁹I [5])と矛盾はない。

参考文献: [1] Nakano, Y., Inoue, M., Komura, K.: *J. Oceanogr.* **64**, 713-717 (2008). [2] Watanabe, Y. W., Watanabe, S., Tsunogai, S.: *Mar. Chem.* **34**, 97-108 (1991). [3] Chen, C.-T. A., Bychkov, A. S., Wang, S. L., Pavlova, G. Y.: *J. Geophys. Res.* **100** (C7), 13737-13745 (1995). [4] Kumamoto, Y., Yoneda, M., Shibata, Y., Kume, H., Tanaka, A., Uehiro, T., Morita, M., Shitashima, K.: *Geophys. Res. Lett.* **25**, 651-654 (1998). [5] Suzuki, T., Minakawa, M., Togawa, O.: *Geophys. Res. Lett.* (2009) (submitted).